十八年の生涯を閉じる クロ

▼……十一月三十日の朝、クロはこの世を去った。

▼……突如本校に現われて、公仕室の一角に住みつくようになって十余年。その年は、推定で人間の百才近くだ……

▼……ったという。ここ二、三年はめっきり弱くなって、今年の六月に命も危ぶまれたが、何とかもちこたえた。……

▼……とはいうものの、やはり年には勝てず、悪性腫瘍が原因して、ついに死亡した。

▼……深志において、ひとつのスタイルを形づくり親しまれたクロ。そんなクロの生前の姿を偲んでみた。

十一月三十日朝七時二十分、クロはこの世を去った。老衰と悪性腫瘍による死。十八年の命であった。と言っても、クロの生年月日は誰も知る者はないのだから、十八年とは推定である。生年月日はかりか、出生地も、親のことも、クロの生い立ちに関する事実はすべて不明である。昭和三十六年の秋、クロはトンボ祭の仮装行列に西郷隆盛の犬として出場した。クロの深志における歴史はそこに始まった。

クロは平凡な犬であった。庶民的であると表現する人もいる。性格は明朗、めったに人に向かってほえたりなどはしなかった。が、これは、深志内の者に対してだけで、外部の者にはほえた。公仕さんの話によると、厩屋さんが来た時は、帰るまでほえたそうだ。こんなに多くの者が出入りしているのに、クロには外部の者をはっきり区別することができたのだ。

ここに書くまでもなく、クロは口のまわりがわずかに白っぽいだけで、あとは足の裏まで真黒だった。〝クロ〟という名も、誰がつけたということもなく、自然についた。ごく当然で、〝クロ〟以外の名がクロにつくとは思えない。また、クロは、幾分栄養の取りすぎと言われてもしかたないようなからだつきであった。しかし深志に来たころはやせていてよく走ったという。若かったのだから当然だが……。我々には、からだをもてあましてとぼとぼと歩くクロの方がクロらしく思われる。

はじめクロはやせていたと言うが、クロは野良犬だったのだ。やせた家なし犬が、こうも太り、長生きできた原因は、やはり食べ物にある。まんじゅうのような甘い物や、肉が好きだった。朝晩二回の献立は、最近は豚の肝臓を煮たものやひき肉だった。以前は何でもよく食べたが歯が悪くなり、あまり食べられなくなってしまったのだ。深志に住み着いて以来、クロに食事を与えてきたのは、公仕さんたちである。栄養がよく、消化器管はまったく異常がなかったと獣医の土屋先生は言われた。クロは長生きしたと誰もが言い、書き立てるけれど、公仕さんの力がなかったらクロは一年と深志に住むことはできなかったかもしれないのだ。

クロは多くの人々に愛されてきた。職員、生徒はもとより、新聞・雑誌等で聞きつけて手紙をくれる人もいた。クロが誰からも愛されたそのわけを考えると……。クロはただの雑種であり、いろいろな芸当をするわけでもない。とりわけ可愛い目をしているでもないが、愛嬌があってあまりほえなかった。クロは性格がよかったのだ。そして、人を識別して、自分を可愛がってくれる人には特になついて付いてまわった。

クロが職員名簿に番犬として載っていることは有名である。朝、まず玄関の前に坐る。何をするでもなく坐っているのだ。そして昼間は、校舎内を先生や公仕さんに付いて歩き、また、冬は職員室・事務室・校長室等のストーブのそばでねそべる。（われわれは、それを見て、ああクロはいいなあ、などと思うのだ）しかしクロはちゃんと仕事もする。夜七時ごろ、公仕さんが校舎内の巡視をする時に付いて回る。教室の戸をあけると、クロは教室中をひとまわりして来る。何か気をひく物でもみつけるとなかなか出て来ない。暗いので気づかずに戸を閉められて、閉じ込められたこともたびたびあった。公仕さんが何かとまどっていると、ちゃんと待っている。最近は病気のため老いのためか、二階三階にはまわらなかった。また、職員会にも出席し、ボーナスももらっていた。これは職員の間でのカンパだ。

こうしたクロの存在を、ある先生は水のようだと言う。いて当然であり、いないと寂しい。クロが死んでから、朝、クロの頭をなでられなくなって寂しいと公仕さんは言われた。「クロ死す」の知らせに、退職された先生方も駆け付けた。

職員の間でのクロの存在と我々の間でのそれとはやはり異なる。クロと共に送った学校生活は短くまた頭をなでてやる程度のつきあいであった。「クロよ安らかに眠れ」より先に、「あの犬もついにいったのか」が頭に浮かぶのではないか。（しかし、どんなに捜してもクロを憎んだ者はいないであろう。）十余年この学校に籍を置いてきたクロが、ついに老いて死んだ。その年に、我々が偶然往籍していたに過ぎない。しかし、やはり、クロは我々の仲間であり、だれでもクロにまつわる小さな思い出を持っているだろう。（それは決していやな思い出ではないにちがいない。）

我々の後輩は、もうクロの頭をなでることも、それどころか、あの黒い太ったからだを見ることもできない。クロの思い出を持つ世代は我々が最後だ。もし仮りに、クロのりっぱな銅像が作られてもクロの小さな思い出が大きくなることはない。銅像がなくても、小さな思い出はそのまま心に残っていくのだ。我々が卒業してクロのことを思い出した時、それが銅像であるはずはない。生きていたあのやわらかい毛のクロだ。クロを知らない後輩達は、クロと言えば像を思い出すことになるのだろうか。もっとも、クロは深志生活の第一ページで、仮装行列の「西郷隆盛の犬」を演じたのだが、それは、「世界の銅像めぐり」のひとつだと言う。生前は銅像役を演じ死後は本物の銅像になるのだろうか。（仮りに、銅像が建てられたとしたら、クロは銅像に始まり銅像になって終って行くのだ。）

クロは数々の新聞・雑誌・テレビやラジオにも登場し、名物犬と言われた。深志で一番マスコミに名を出したのはおそらくクロであろう。だから他校の人もクロのことは知っている。そんなにもクロが、世間で騒がれ出したのは二～三年前からであり、それまではクロは静かな日々、幸福な日々を送っていたのだ。いや、マスコミに名を出してからもクロには別に変わりはなかったにちがいない。やはりクロはただ深志構成メンバーの一員としてコツコツと生きてきた。

クロは幸福な犬だった。そしてまたクロの子も、みな、野良犬になることなく飼い主に恵まれた。三年前までは年に数匹ずつ子を生んでいた。どの子犬もみな、出生地は化学室の下であった。

始めに書いたように、クロは十一月三十日に死んだ。急激に弱ったのは二日前からだった。もう立てなくなっていたのに、公仕さんが鍵を持ち出すと立ちあがろうとしたという。自分の役目を果たそうとしたのだろう。

結局は、こうしたクロの賢さ、明朗な生格、クロを取り巻く人々の愛情が、クロの独特な存在を作り出したと言える。それはただの犬ではなく、職員でもなく、友達でもなかった。

黙ってとぼとぼと歩く真黒なクロの姿が思い浮かぶ。それが言葉では表現できない、クロの存在……クロと少しばかりのつきあいを持った者の言えるクロの思い出……だろうか。

昭和元禄 犬公方

去る十一月三十日朝〝名士クロ〟が姿隠れになりました。

そして、それから間もなく新聞委員会で彼女のことを今回の新聞に特集することに相なったのであります……

――しかし、所詮彼女は「お犬さま」でしかなかった――

六月に彼女が重体になった時、多くの心ある皆さんが、起死回生を祈って募金運動を行なったそうです。卒業した先輩からも、励ましの手紙やゼニが送られたそうです。そして、その甲斐はあったようです。

が、私はどうも解せません。彼等の心理が。何故彼等はそうしたのか。と言うよりは「そうできたのか」が。もちろん、生き物に対する「やさしい」気持ち。それもありましょう。たいへん結構なことであります。ただでさえ無味乾燥な世の中ですから。でも私は、路上でペチャンコになって屍物をブニョブニョと回りに散らし、恨めしそうに目だけでにらんでいる犬の死骸をよく見ます。いかに深志の〝やさしい〟生徒さんでも、ペチャンコの彼を路上から抱き起こして丁重に葬ってやるだけの「やさしさ」がありましょうか。そんなに極端な例でなくても、どうもこれは単なる「生物への愛情」なんて物だけではないようです。と言うと、これは「クロ」の特殊性に関係がありはしませんでしょうか。

彼女は十二年前に現われました西郷どんの連れ犬として。当時なぜ彼女が他の野良公たちがってその後、公仕さんに飼われるようになったかは、私は知る由もありません。が、とにかくも、こうして「クロ」が誕生したそうです。ところで、この学校には同じイヌ科でもフルダヌキという種類の動物も居りまして、一部のフルダヌキは彼女とたいへん親しくなったのです。十年も連れ添っていると彼等は彼女を正式に仲間として登録しました。ここから彼等の彼女に対する公な「特別扱い」が始まりました。瓦版に彼女のことを載せました。てれびじょんなるものにも出しました。その他色々なものに載せて「おふれ」にしたのです。（もっと面白いことに、十二年前彼女を可愛がり出した或る教師の心理と、綱吉のそれとはどうも通じる所があるように、私には思えるのですが……）まあ十年も連れ添って居れば、そうしたくなるのもわからないでもありませんなにしろ時は元禄なのですから。さて、例のクロに熱心な皆さまについて話を戻しまして、なぜ十年以上後の皆さまが、かくも彼女に御熱心か。（クロ出現当時の方方が熱心になるのでしたら、まだ話は解せるのですが……）答えはひとつ。「おふれ」を見て、それに従ったのです。早い話がマスコミの餌食。

さきほど私が申しました「『クロ』の特殊性に関係がありはしませんでしょうか」の部分で、「バカ、当然だろう」と思った貴方。確かに一面、彼女は特別な犬です。深志の象徴なんと言われまして、でも貴方は、犬公方の「おふれ」で「お犬さま、お犬さま」と言って犬に頭をさげていた元禄の平民とあまり違わないのではないの。「たかが野良公」と思っていた人の方が数枚うわてだと私は思います。何も野良犬を蹴っ飛ばしたり死んでも、冷たくあしらえ、なんて申し上げているのではありません。

「田舎芝居にもそろそろ幕を！」と申しているだけなのです。

何だかんだとお説教じみたことを申してまいりましたが、そういう私も日陰者たちのヒネクレ者。つまらぬことにも超然としていられない私も、やっぱりバカな人間なんでございましょうかネ。

（自称　アイロニストより）

クロよ安らかに眠れ

藤岡改造

クロをほんとうにかわいがっていたのはだれだろうか。飼い主である校長先生か。それとも、深志の先生か、我々生徒なのか。卒業生であるのか……。

それではクロにとって一番必要だった人はだれだろう。クロを愛し、肉親のように生活して来た人それは公仕さんではないだろうかおじさん以外に、本当にクロの死を悲しめる人はいないのではないか。

これは、そんな公仕さん渡邊さん西尾さん小山さんにお話を聞いて書いたものです。渡辺さんなどは、ぽつんぽつんと思い出しながら、十年以上連れ添って暮したクロのことを、まだ涙のかわかない様子で話してくださいました。

クロが来た時のこと

一番最初は生徒について来ただわ。あれは夏休みの合宿だったかいな。裏の部室の方にいてさそれがどういうわけかちょこんちょこんとこっちへ来てな。御飯くれたりしてるうちに、ここに住みついたわけさ。

「職員クロ」のこと

職員室に、お屋とか、会議があると行ったただわ。それから職員会や授業に顔出すようになったのは最近だわ。

「番犬クロ」のこと

オラたちの手番としてまわってくれたのが一番助かったわけだわ。知らない人がいりゃなくでな。これだけ多勢人がいても、うちの生徒か、よその生徒かちゃんと見分けがつくだで。なんかあってよその生徒が来ると吠えたくだで。あれだけはたいしたもんだ。一番吠えたのは、くず屋が来たときだ。

見まわりについて来てと言われたのが、ヤロのせいたくの原因でな。

オラがヤロと同じかまの飯食ったのは十三年ぐらいだな。泊りでねえときは、クロの弁当と二つ持ってくるだ。そだでオレ一日も休みっこなしさ。

ああいうもんでも人間と同じできまった食事以外に物をくれりゃ胃を悪くするでな。

職員会なんかありゃヤロ顔出すすら、おさしみなんか好きだでな。先生のひざを前足でひっかいて、なきもしなんで催促するだ。平林校長なんか、みんなせびらせちゃう。けんど、そのあくる日は、必ずためだ。食べ過ぎるでな。

子供たちのこと

とてもじゃねえが、かんじょうできねえすら。一番たんと産んだのが七匹だ。先生が持ってったり、生徒が持ってって、みんなどっかへ行ってるだ。それでも処分に困って一度捨てに行ったことがあるだが、ちょうどどっかの小学生にみっかってな。「おいさん、オレにおくれや。」って言うだ。それでみんな持たせてやったでな。

クロの子がクロに似てみんな頭いいっかっていうと、全部が全部クロに似ちゃいねえだ。もらってっても、始末に困ってひきとってくれってのがあったな。

学校の向こうの赤電話の前のうちな。あそこのが最後の子だが、アレは三年くらい前の子すら。化学室の縁の下な、あれがクロのお産の場所さ。一匹ずつ連れて来て人に憎らしちゃあ、一匹また連れて来るだ。そりゃうまいもんだぞ。何か食べるようになると連れて来るで、もうこんなにでかくなってるだ。そうなりゃもう捨てらんねえぞ。化学室の下へ行って目あかんうちに連れ出そうとしたことがあっただが、暗いとこくもぐってったら、後ろで何かつうくだ。オラまあびっくりして見たら、クロさ、連れてかないでくれっていうだな。

クロがいなくなってからのこと

飼ったっていいか知れんが、オラやだぞ。みんな頭なでてくれる人はいいけど、きめて飯くれなきゃ飼えねえでな。まあ生き物だでいつかは死ぬだが。それでもやなもんだ。

夜はぴかっと目光らせてるすら戸をあけたとき何もいねえのは寂しいもんだな。だで、えらいクロのこと言われりゃ、せつなくてしょうがねえ。もう朝に晩に飯くれられねえしさ。長い間一つかまの飯食って来てさ、もうクロの弁当いらねえなんて言われりゃせつなくてしょうがねえだ。

オラの話はこれだけさ。それにしても、あんなにかわいがってもらやあ、クロも幸せってもんさ。犬であんなにしてもらってでな。

こう言って渡辺さんは、ぽつんと言葉を切られた。十年以上もクロの父親であり、また母親としていっしょに生活して来られたおじさんの話からは、本当にクロを思う気持ちと、クロのいなくなったあとの、生活の味気なさが感じられるようであった。口には出さなかったが、クロの死を、あまりお祭りのようなさわぎをしてほしくないと、感じておられたのではないだろうか。

最後に、話の端々に言われたことだが、クラブ等で、犬や猫・鳥などを飼う時には、彼らも人間と同じように、生命を持ったものであることを忘れないでほしい。休みにだれもえさをやらなければ、その間に死んでしまうのである。そして、その姿を目の当りに見せつけられるのはおじさんたちなのだから。

公仕さんのお話

クロのオフクロに聞く

ことになって、新聞に出たり、テレビにも出演し、すっかり名物になってしまった。

クロは犬としていい性質をもって生まれたと思われる。それ故に住みついたこの学校の職員や生徒たちに可愛がられた。勿論、無関心な人はあったろうが、危害を加えるような人はなかった。そのことで動物がもつ残虐性とか功利性とかいったいやらしいもの、みにくいものが容易に表われなくなり反対に素朴さ、素直さといったよい面がその行動を規制し、温順でかいな。裏の部室の方にいてさそれがどういうわけかちょこんちょこんとこっちへ来てな。御飯くれたりしてるうちに、ここに住みついたわけさ。

「職員クロ」のこと

職員室に、お屋とか、会議があると行ったただわ。それから職員会や授業に顔出すようになったのは最近だわ。

「番犬クロ」のこと

オラたちの手番としてまわってくれたのが一番助かったわけだわ。知らない人がいりゃなくでな。これだけ多勢人がいても、うちの生徒か、よその生徒かちゃんと見分けがつくだで。なんかあってよその生徒が来ると吠えたくだで。あれだけはたいしたもんだ。一番吠えたのは、くず屋が来たときだ。

見まわりについて来てと言われたこともあるだ。もう明り切ってまわるで、黒いでわからねえすら。もう部屋の中にいねえと思や、どこかにとじ込められてるだ。定時制の職員室なんでな。それまでなかねえけんども、戸をひっかいてるだ。人が来て戸をあけると、ものすごい勢いでとび出して来るだ。それでも死ぬ前最後にゃ腰が立たなくなってね、カギの音がすりゃ、いっしょうけんめい立とうとして前足を出すだが。ヤロも自分の役目だと思ってただなそれもほんとに動けなくなったのは三日ぱかだ。それまでは元気にとびまわってたでな。

食事のこと

豚のレバーが一番好きだった。その間に雑肉買ってやってもあまり食わねえだ。結局ヤロの喜んで食べる物と思って買ってくれたのが、ヤロのせいたくの原因でな。

オラがヤロと同じかまの飯食ったのは十三年ぐらいだな。泊りでねえときは、クロの弁当と二つ持ってくるだ。そだでオレ一日も休みっこなしさ。

ああいうもんでも人間と同じできまった食事以外に物をくれりゃ胃を悪くするでな。

職員会なんかありゃヤロ顔出すすら、おさしみなんか好きだでな。先生のひざを前足でひっかいて、なきもしなんで催促するだ。平林校長なんか、みんなせびらせちゃう。けんど、そのあくる日は、必ずためだ。食べ過ぎるでな。

子供たちのこと

とてもじゃねえが、かんじょうできねえすら。一番たんと産んだのが七匹だ。先生が持ってったり、生徒が持ってって、みんなどっかへ行ってるだ。それでも処分に困って一度捨てに行ったことがあるだが、ちょうどどっかの小学生にみっかってな。「おいさん、オレにおくれや。」って言うだ。それでみんな持たせてやったでな。

クロの子がクロに似てみんな頭いいっかっていうと、全部が全部クロに似ちゃいねえだ。もらってっても、始末に困ってひきとってくれってのがあったな。

学校の向こうの赤電話の前のうちな。あそこのが最後の子だが、アレは三年くらい前の子すら。化学室の縁の下な、あれがクロのお産の場所さ。一匹ずつ連れて来て人に憎らしちゃあ、一匹また連れて来るだ。そりゃうまいもんだぞ。何か食べるようになると連れて来るで、もうこんなにでかくなってるだ。そうなりゃもう捨てらんねえぞ。化学室の下へ行って目あかんうちに連れ出そうとしたことがあっただが、暗いとこくもぐってったら、後ろで何かつうくだ。オラまあびっくりして見たら、クロさ、連れてかないでくれっていうだな。

クロがいなくなってからのこと

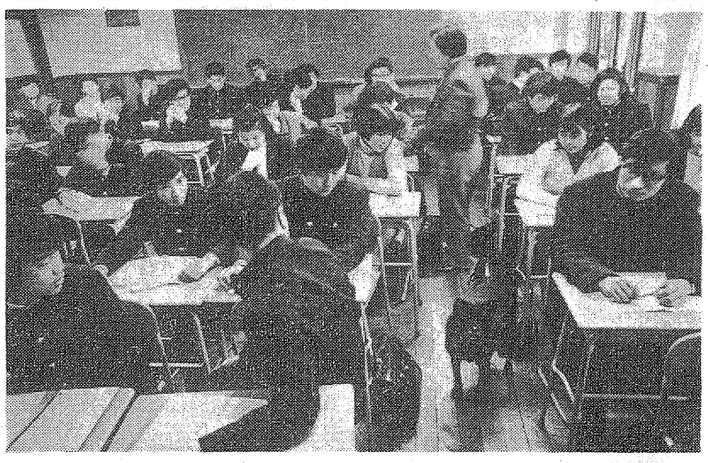
飼ったっていいか知れんが、オラやだぞ。みんな頭なでてくれる人はいいけど、きめて飯くれなきゃ飼えねえでな。まあ生き物だでいつかは死ぬだが。それでもやなもんだ。

夜はぴかっと目光らせてるすら戸をあけたとき何もいねえのは寂しいもんだな。だで、えらいクロのこと言われりゃ、せつなくてしょうがねえ。もう朝に晩に飯くれられねえしさ。長い間一つかまの飯食って来てさ、もうクロの弁当いらねえなんて言われりゃせつなくてしょうがねえだ。

オラの話はこれだけさ。それにしても、あんなにかわいがってもらやあ、クロも幸せってもんさ。犬であんなにしてもらってでな。

こう言って渡辺さんは、ぽつんと言葉を切られた。十年以上もクロの父親であり、また母親としていっしょに生活して来られたおじさんの話からは、本当にクロを思う気持ちと、クロのいなくなったあとの、生活の味気なさが感じられるようであった。口には出さなかったが、クロの死を、あまりお祭りのようなさわぎをしてほしくないと、感じておられたのではないだろうか。

最後に、話の端々に言われたことだが、クラブ等で、犬や猫・鳥などを飼う時には、彼らも人間と同じように、生命を持ったものであることを忘れないでほしい。休みにだれもえさをやらなければ、その間に死んでしまうのである。そして、その姿を目の当りに見せつけられるのはおじさんたちなのだから。



駒沢大学

大学、院
仏教学・地理学・日本史学・国文学
英文学・社会学・心理学・商学
経済学・公法学・私法学　各専攻

経済学部　経済学科・商学科
法学部　法律学科
経営学部　経営学科
文学部　国文学科・英米文学科・地理学科
歴史学科・社会学科
仏教学部　禅学科・仏教学科
経済学部第二部　商経学科
法学部第二部　法律学科
経営学部第二部　経営学科
短期大学　国文科・英文科（女子）
放射線科（共学）・仏教科（夜）

入試要項（願書）・大学案内（〒共　二五〇円）
入試問題正解集「駒大への道」（〒共　三〇〇円）
請求先　154 東京都世田谷区駒沢一丁目
駒沢大学広報課B係
（電）東京03（四三）六一一一（大代表）

大衆食堂
スミレ食堂
松本市中央1丁目2―20
（新伊勢町通り）
TEL 32―1661

学生の店
嶋屋
深志高校東門東